
和賀岳自然環境保全地域調査(1988年度)

(環境庁自然保護局 / 受託者：財団法人 国立公園協会)

キーワード：気候調査、地形・地質・土壌調査、植物調査(植物相、植生)、動物調査
(哺乳類、魚類・両生類・爬虫類、鳥類、昆虫類)

【調査の概要】

(1) 調査目的

和賀岳自然環境保全地域とその周辺を含めて各種の自然環境を調査し、この結果を自然状態の保全に役立てることを目的とした。

(2) 調査対象地域

調査は、稲尾岳自然環境保全地域の1,415haを中心として、その周辺を含めた地域を対象として調査を実施した。

(3) 調査の内容と方法

調査の実施にあたっては、それぞれの専門分野の学識者からなる委員会を設置し、調査の項目、方法等の詳細を定め、現地調査を行った。

自然環境に係る調査項目及び調査内容は次のとおりとし、自然環境保全地域における人為影響並びに特定の植物群落、動物等各保全地域を特徴づける要素に着目しつつ調査区を設定し、地形・地質、植物、動物等の特性並びに人為影響の程度を把握した。

1) 気候調査

既存資料により自然環境保全地域及び周辺部の気候的特性を把握した。

2) 地形、地質、土壌調査

自然環境保全地域及び周辺部の地形等の特性を明らかにするため、既存資料等により地形発達過程を把握するとともに、地形、表層地質、土壌の分類を行い、その分布を把握した。また、調査区の微地形、土壌層の特性並びに人為影響の程度を把握した。

3) 植物調査

自然環境保全地域及び周辺部の植物の特性を明らかにするため、既存資料等により植物相及び植生分布を把握した。また、調査区の植物群落の組成、構造、遷移、動態の特性並びにこれらに対する人に影響の程度を把握した。なお、調査は7月及び9月に実施した(報告には、1985年9月の調査結果も含む)。

4)動物調査

自然環境保全地域及び周辺部の動物の特性を明らかにするため、既存資料等により動物相(哺乳類相、魚類相、両生・爬虫類相、鳥類相、昆虫類相)及びその分布状況を把握した。また、調査区における哺乳類、魚類、両生・爬虫類、鳥類、昆虫類の生息状況及びその生息環境の特性並びにこれらに対する人為影響の程度を把握した。

(哺乳類)

- ・調査は目撃調査、フィールドサイン調査、分類群に対応した捕獲調査のほか、元ハンターを対象とした聞き取り調査も実施した。

(魚類・両生類・爬虫類)

- ・調査は6～8月にかけて実施し、これ以前における未発表資料、地元住民を対象とした聞き取り調査等を加えてとりまとめた。

(鳥類)

- ・調査は、ラインセンサス調査によって、繁殖期(6月及び7月)に実施した。

(昆虫類)

- ・調査は、巡回調査(見つけ捕り法、スウィーピング法、ピーティング法等)、誘蛾灯調査、蚊帳トラップ調査、牛糞を誘引源としたトラップ調査のほか、水生昆虫調査を、6～10月に実施した。

(4) 調査の結果

1)気候調査

- ・自然環境保全地域は、奥羽脊梁山脈北部の真昼山地に位置する和賀岳の山稜及びその太平洋側斜面の海拔600～1,440mに位置していた。
- ・自然環境保全地域の年降水量は2,500mm以上と推定され、梅雨季には豪雨がしばしば発生、また冬季には豪雪がみられ、日本海岸気候区に属していた。
- ・山岳地域の気候状態を示す一つの指標である凍結日数及び凍結融解日数は、和賀岳山頂付近でそれぞれ120日、90日前後を示した。また、亜高山帯下限とされる温量指数45・月を示す高度は約1,150m、山地帯下限とされる温量指数85・月を示す高度は約150mであった。

2)地形、地質、土壌調査

- ・奥羽脊梁山脈は火山地域と非火山地域とが交互に連なるが、真昼山地は非火山地域に属し、白亜紀の花崗岩類と新第三紀の火山岩類・堆積岩類からなっていた。
- ・自然環境保全地域の中核をなす和賀岳付近は、新第三系が自然環境保全地域の東部を占める高下岳周辺には花崗岩類が分布していた。
- ・真昼山地は前期更新世に開始した地層地塊運動によって、現在も隆起していた。

- ・自然環境保全地域の斜面は稜線部の緩斜面とそれを刻む地すべり地・崩壊地等によって構成されていた。

3)植物調査

(植生)

- ・植生については、56地点の植生調査資料から、15群落が認められた。なお、これらの群落はすべて自然植生であった。
- ・山地帯から偽高山帯・亜高山帯の代表的植生であるブナ林とミヤマナラ林・ミネカエデ林、風衝草原・雪田植物群落等が広い分布面積を示し、これらにチシマザサ群落、タニウツギ低木林を加えた植生が地域の主体を占めていた。
- ・これに対して、ハイマツ低木林やサワグルミ林、キタゴヨウ・クロベ林といった局地的な環境に成立する群落の分布は限られていた。

(植物相)

- ・調査の結果、74科309種が確認された。
- ・調査地域は日本海地域系植物によって特徴づけられるほか、和賀岳と高下岳、薬師岳の稜線部は亜高山帯及び偽高山帯にあり、変化に富んだ地形とあいまって種類が豊富であった。

4)動物調査

(哺乳類)

- ・大型獣としてニホンツキノワグマ、ニホンカモシカ、中型獣としてホンドキツネ、ホンドテン、ニホンアナグマ、トウホクノウサギ、ニッコウムササビ等、12種の哺乳類(コウモリ類を除く)の生息が確認された。
- ・コウモリ類については、モリアブラコウモリ、クロホオヒゲコウモリ、シナノホオヒゲコウモリ、ニホンテングコウモリ、コテングコウモリの5種が確認された。

(魚類・両生類・爬虫類)

- ・魚類については、イワナ、カジカの生息が確認されたほか、スナヤツメの生息情報を得た。
- ・両生類については、サンショウウオ類はクロサンショウウオ、ハコネサンショウウオ、トウホクサンショウウオが確認された。また、カエル類ではアズマヒキガエル、タゴガエル、ヤマアカガエル、モリアオガエル、カジカガエルが確認された。
- ・爬虫類については、カナヘビ、ヒバカリ、マムシが確認されたほか、トカゲ、シマヘビ、ジムグリ、アオダイショウ、ヤマカガシの生息情報を得た。

(鳥類)

- ・調査の結果、和賀岳自然環境保全地域内で 32 種、自然環境保全地域外の標高 400m 以上で 54 種、延べ 55 種の生息が確認された。なお、これまでの記録とあわせると、和賀山塊における鳥類の記録は 12 目 31 科 95 種となった。
- ・確認種のなかには、イヌワシ、クマタカ、カヤクグリをはじめ、多くの猛禽類や渓谷性鳥類等が含まれていた。

(昆虫類)

- ・調査の結果、13 目 140 数科 1,000 種強の昆虫類を検出し、その 90%以上を同定した。また、半翅目、双翅目の未同定種が多数あり、今回検出しなかった既報の鱗翅目が 220 余種あるので、昆虫全体では本地域から 1,500 種弱が得られたことになった。
- ・このうち、日本での新記録としてトウキヒメハマキ(仮称)が含まれていた。
- ・このほか、本地域に特徴的なもの、また稀種としてはベニヒカゲ、ミヤココブゾウムシ等多くの種が確認された。

(5) 調査の報告書及び成果物の名称

-
- ・「和賀岳自然環境保全地域調査報告書 Conservation Reports of the Wagadake Nature Conservation Area, Iwate, Japan」(1989 年 3 月 環境庁自然保護局)